

絵で記録する高橋余一

たか はし よ いち

高橋余一が記録したもの

昭和37年、思いつくままスケッチし始めたころの様子を「…この記録描き、どうせ描くなら真実をと資料漁りに西東する、そして知人の皆さんから賜る助言、ご協力に感謝しつつ描き続けたいとおもう。」(「私の発願」『美濃生活絵巻(上)』)と記しており、この言葉から、描写は客観的資料に基づいて描写するという高橋の姿勢がうかがえます。描きつづけていくにつれ徐々に系統的に分類・整理してまとめるようになり、昭和50年代までに、全19巻、長さにして56メートルに及ぶ「生活絵巻」としてまとめました。1993(平成5)年8月には、貴重な歴史資料として美濃加茂市の指定文化財となりました。

絵巻が制作された昭和30年代は、高度経済成長とともに社会が激変した時代。高橋は地域を歩いてその変貌を肌で感じながら、かつての生活史をまとめていったのです。聞き取ったことを想像しイメージして絵画という形で残す、その類まれな高橋の才能が、この地の人々の暮らしと歴史を蘇らせたのです。



「生活絵巻」(部分)



〔略歴〕
高橋余一(1898～1984)は、加茂郡古井村(現在の美濃加茂市本郷町)に生まれ、京都の絵画塾で日本画を学びました。古井小学校で教職を6年間務めた後、会社員に転職、この間、町議会議員ほか多くの公職をつとめました。退職後、病气により自宅療養をするかたわら、1962(昭和37)年ころから周辺の歴史遺産を調査し、古老からの取材を重ねて時代とともに消えゆく明治から昭和にかけての古井町の庶民の暮らしぶりなどを「生活絵巻」として描きあげました。